

平成27年4月から生活していく上でのさまざまな困りごとに関して相談と支援を行うための「生活困窮者自立支援法」が施行されました。生活が困窮していく原因も多様化する中、低所得や就労、家計管理がうまくいかないことなどによる「経済的困窮」という課題と同時に、社会や地域とのつながりが希薄になる「社会的孤立」という課題を抱える人々への支援が求められています。

今回の特集では、ここ黒部で若者のひきこもりや就労の支援に取り組んでいるNPO法人教育研究所の牟田光生(むたみつお)さんのインタビューを交えながら「社会的孤立」の課題について考えていきます。

特集

ひとりのことを、 みんなで支えられる 地域を目指して

「社会的な孤立を考える」

ひきこもりについて

「ひきこもり」とは、仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6か月以上続けて自宅にひきこもっている状態(※1)にあることで、内閣府が平成22(2010)年2月に実施した調査(※2)によれば、「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」に該当する人々(狭義のひきこもり)は日本全国で23・6万人と推計されています。

「日本全国で」と言われると、どこか遠い場所できている話とい



う気がしてしまいがちですが、富山県内で年間2,000件近く、新川地域だけでも年間約20〜30件のひきこもりに関する相談が実際に寄せられています。

黒部で取り組む

若者への支援

そんな中、NPO法人教育研究所では、いかわ若者サポートステーションを厚生労働省より受託し、働くことについてさまざまな悩みを抱える若者の支援を行っています。また、宇奈月自立塾においては合宿生活の中でコミュニケーションスキルやビジネスマナーを学びながら、さまざまな就労体験を行っていくことで、本人が自分の進む道を自分なりに歩んでいけるようサポートをしています。

黒部社協・西田(以下、西田) 牟田さんご自身が現在の活動に取り組まれるようになったきっかけを教えてください。

牟田さん(以下、敬称略) 子どものころ、神奈川県の自宅の1階がフリースクール(※3)で、父親がそういった活動をしていたということがひとつですね。だから自分も学校から帰ると、通っている人にキヤッチボールの相手をしてもらうこともあったりして。それから、小学校3年生の時に母が亡く

なり4〜6年生の夏休み期間には、当時父が運営に関わっていた合宿所で過ごしたり、高校時代も寮での合宿生活をしたりと、そういった経験があったというのがあります。

他人事ではない

「ひきこもり」

西田 実際のところ、どういったことがきっかけでひきこもりという状態になっていくのでしょうか。

牟田 実はひきこもりといった状態に至る前には、自分の心に何らかの大きな要因があるんですよ。それが失業だったり、失恋というのもあるし、家族の不幸だったり。そのなかでコミュニケーションの問題が非常に大きくて、自分の心の苦しみを周りに言えない、言える人がいない、もしくは言える環境にもないといったことがあるんです。そして、そういったことがひきこもりという状態として出てきたり、うつやノイローゼなどの症状として出てきたり。じゃあ、それを治療しましょうということではなくて、その根本にあるところに関わっていく必要があると思うんです。

西田 なるほど、その根本的な部分へのアプローチを宇奈月自立塾での集団生活の中で体験・体感し

ていくということですね。

牟田 そうですね。集団生活って、「全部を自分で」じゃなくて、役割を分担しての生活なんですよね。自分の居場所、所属する場を得て、役割を持ちながら、自分がこの先どうしていきたいのかを考えた経験や積みだり、自分なりの仕事の仕方を見つけたたりしていく。ここではそうやって、自分の道を見つけて歩いていく力を身に付けていってもらえればなと思っています。僕らは『歩行器』みたいなもので。

そして周りが何かを言うよりも、同じ悩みや似た経験をしてきた者同士で話をしたりする中で、この人はこうやって生きているんだとか、自分はどういう風にしようかな、自分にはこういう道があるというところが見い出せたり。集団の中ではそういった相互作用も生まれます。車を持っている子と仲良くなったりどこかへご飯を食べに行ったりという関係性も、その中で生まれてきているんですよ。

家族で抱え込まない

西田 ひきこもりという状態に陥った時、周囲の目が気になったり、家族の問題だからと相談するのを躊躇してしまいそうですが？
牟田 そうですね。しかし、家族間

だけでは解決というのは、なかなかできないんですね。冷静に話し合おうとしても、感情論の押し付けや、決めつけになってしまう。特に親子という関係性のなかでは、心配しすぎているがゆえに言い過ぎるということもあります。一方で、本人は自分の苦悩をうまく人に表現できないから、今の状況になっちゃってしまっている。そんな時にうまく聞き出したり、仲介していくのが我々支援者でもいいし、気の利いた親戚のおじさんでもいいと思うんです。

それと、ひきこもっているという状況は本人もつらいけども、親もつらいんですね。親がストレスによってうつなどの病になるといったことも少なくないんです。だからこそ抱え込まないでもらいたいし、相談することで次につながることもあると思います。家族も本人と一緒に考え、長い目で見ながら寄り添っていってもらいたい。そのために本人とどう関わっていくのか、守秘義務もあるのだから安心してご相談いただければと思いますね。決してあきらめないで、抱え込まないでほしいです。



ひとりにならない、
ひとりにさせない

つながりの大切さ

牟田 本人に外へ出ていくことを強制するのではなく、本人が「何とかしよう」と思う気持ちを強めていくために、にいかわ若者サポートステーションと宇奈月自立塾で幅広い支援をおこなっています。体験なども交えながら、一人ひとりに合わせて対応していけると思っています。

西田 私たちや地域住民にはどのようなことができるのでしょうか。

牟田 『いつも家にいるけど仕事に行っているのかな?』と気にかけてもらったり、地域の行事や関わりが生まれる機会に声をかけてもらったりしながら、家族以外にも地域の中に話せる人ができていけばと思いますね。ひきこもりという状態にあっても、人との関わりを完全に拒絶しているわけではなく、苦手でうまくできないからそういった選択肢になっているところがあります。本当は居場所や役割が欲しいのに、ずっとそれがなくまままで過している、と、ほとんど人とのつながりも薄れていってしまうんです。自分の居場所や役割を明確にしていければ、本人が孤立して相談もできなくて苦しい状況というのはいくつものようになってくるのではないかなと思います。

今やインターネットの普及などにより、誰とも顔を合わさず、会話をしなくても、欲しいものを買い、知りたい情報を得ることができず。手軽さや便利さから、普段はそういう生活に慣れていて、あえて人と関わらなくても生活ができてしまう現実があります。

しかし、困った時や悩んだ時には、一人の力、家族の力だけでは解決が難しいこともあります。今回のインタビュを通じて、その課題を当事者や家族の中の問題としてそのまま抱え込み、社会や地域から孤立していかないためにも、地域で日頃から声をかけ、支え合える関係や地域での役割やつながりを持つことが大切であると感じました。そして、そういった相談ができる場所があることを知っておくことも「社会的孤立」を未然に防ぐことにつながっていくのではないのでしょうか。

(※1)厚生労働省による定義
(※2)「若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)」
(※3)何らかの理由で学校に行くことができない、行かない、行きたくても行けないといった子どもたちが、学校の代わりに過ごす場。



NPO法人 教育研究所

むた みつお
牟田 光生 さん

平成17年～「厚生労働省委託」若者自立塾の一つであるNPO法人教育研究所「宇奈月自立塾」寮長。平成22年4月より、基金訓練合宿型若者自立プログラム科を開始。平成20年年末は「派遣切り」にあった方たちの受け入れも行った。NPO教育研究所主宰の講演以外では富山県内で様々な保健所や養護学校(特別支援学校)で講演を行っている。

〈聞き手〉黒部市社会福祉協議会 西田名那

黒部市内の相談機関のご案内



NPO法人 教育研究所
宇奈月自立塾
黒部市宇奈月温泉5509-16
TEL 0765-62-9681
FAX 0765-62-1120
E-mail contact@kyoken.org
http://kyoken.org/



いにかわ若者
サポートステーション
黒部市新牧野103 ファーストビル3F
TEL 0765-57-2446
FAX 0765-57-2447
E-mail contact@nsapo.org
http://nsapo.org/how-to-use/



新川厚生センター
(担当区域:黒部市、下新川郡)
黒部市堀切新343
TEL 0765-52-2647

県内には他にも相談機関があります

http://www.pref.toyama.jp/branches/1281/toyama-hikikomori/index.htm (富山県ホームページ内)